

纂 說

— 外國文獻抄 —

1. 悪性腫瘍に於ける血液アルカローゼ」

著者は悪性腫瘍の早期診断並びに手術後の根治性を察知するのに血液アルカローゼ」は重要な意義を有すると述べて居る。

血液の水素イオン濃度は pH 7.36 を以て正常値上界となす。

調査例數 220

内 { 15例……非悪性腫瘍
205例……悪性腫瘍

非悪性腫瘍例に於ては10例は pH 7.35 以下であつたが5例は pH 7.37 以上即「アルカローゼ」を示した。後者は成程組織學的検査では悪性變性を認めることが出来なかつたがやがて之を示すべき段階にあるのぢやあるまいかと述べて居る。

悪性腫瘍例に於ては205例中199例が pH 7.37 以上を示した即ち 97.07% に於て血液アルカローゼ」を證明した。

悪性腫瘍に於ける「アルカローゼ」は手術に依つて漸次低下し術後數週間で正常値にかへる。

「レントゲン治療例に於ても同様のことが見られる、併し手術不可能例或はレントゲン治療に依る反應を認め得ない例に於ては「アルカローゼ」は漸次高まり行く。

手術後永く再發を見ないものは正常 pH 値を保持するが併し再發或は轉位を見る場合は一旦正常値にかへつた pH 値が再び漸次上昇する而してかゝる場合は治療前の値よりも更に高いのが一般である。

(Gasinski : Arch. kl. Chir. Bd. 190, H. 1, S. 73 (1937))

2. 直腸脱の簡單なる一新手術法

局所麻酔の下に肛門縁から 1 cm 離れて之に平行せる圓形切離を皮膚に加へる、すると肛門は直に上方に約 2 cm 退縮して肛門周圍に圓形哆開創ができる。この哆開創の外縁から更に 1 cm の所に第二の圓形切離を加へる、かくして生じた幅 1 cm の皮膚帯は皮下脂肪組織の一部と共に截斷する、すると創は更に廣く哆開してその幅 4 cm に及ぶ。

次に鋭性に切離を進めて外括約筋下部に達し該筋外面をその略中央迄即ちその下縁より 1

— 1 ½cm の線迄充分に剝離する。大體この高さで兩側から下痔神經及び同名血管が筋肉中にはいるから之等を損傷しないやう注意を要する。前方に於ては會陰縫線を、後方に於ては肛門尾骶骨靱帯を切離して更に上方迄括約筋外面を剝離する。最後に直腸内へは綿紗を巻いた拇指大のゴム管を挿入し溝状の哆開創へは綿紗を密に栓塞する。

手術は之で終るのであるが肛門周圍のこの深い創は術後約3週間で肉芽組織を以て充たされて既に強く收縮する。かくて遂には肛門を取り巻く強い癍痕となつて治るのであるがこの癍痕は括約筋と密に癒着し弛緩した該筋の周圍に強靱な環となつて該筋と共に一つのものとして作用することとなる。この癍痕は括約筋の作用を強めるばかりでなく前後に於ては間接に骨盤骨に附着して全骨盤底を支持するものである。

術前準備 下劑洗腸等に依り腸管を空虚ならしむ。

後處置 術後4日目迄絶食せしめ手術當日朝から阿片丁幾20滴を投與する。術後4日目に直腸内挿入のゴム管を除き蓖麻子油を投與して當日から坐浴を開始せしむ。

著者の實驗例は12にして½—4年の觀察にて未だ1例の再發も見ずといふ。但し内4例に於ては癍痕性の狭窄を見たが之等は何れも簡単な癍痕切込及び擴張法に依り比較的容易に治し得たといふ。

(D. Sarafoff : Arch.kl. Chir. Bd. 190, H. 1, S. 219 (1937))

3. 直腸脱手術

著者は前項に抄譯せる論文に於ては高度の直腸脱及び小兒の直腸脱は著者の人工的癍痕形成術に依る効果臨床例なき爲め明言し得ずと述べて居たが本論文に於ては之等の場合にも亦良好なる成績を擧げ得ると述べてその症例を擧げて居る。

症例 49歳♀, 第1回出産時第3度會陰破裂を來したが爾來30年直腸脱と肛門括約不全に悩まざる。1935骨盤底補形術兼 Tiersch 肛門銀線狹小術を受けたるも治せずその後更に銀線環挿入術を受けること2回何れも失敗に終る。銀線環は毎回約40日間挿入した。最後に第4回手術として粘膜切除術を受けたが之又失敗に終つた。この手術後1年に患者は著者を訪れた。直腸脱出の程度は頗る高度のものであつたが著者が前抄譯の癍痕形成術を試みたるに美事に全治したといふ。

尙2½年の女兒にこの方法を施行して之又良好な成績を擧げた事を述べて高度な直腸脱及び小兒の直腸脱にもこの方法は推奨すべきものと云つて居る。

尙著者は直腸脱の發生原因にふれ之には諸説あるも過長S字狀結腸が原因に非ずして弛緩骨盤底が原因であると前症例から結論をつけて居る。この症例ではS字狀部が非常に短かつたのをレントゲン検査に依つて認めたのである。

(D. Sarafoff : Zbl. Chir. Jg. 65, Nr. 16, S. 878 (1938))

4. 完全痔瘻手術法

括約筋外完全痔瘻は之を手術する際括約筋を切離すれば後遺症として大便失禁を見るので之を避けるため著者は次の新手術法を發表して居る。

先づ外瘻孔を切り抜き皮切を肛門前方及び後方に弓狀に延長する。瘻管は之を探求して深部に進み直腸粘膜に迄及んで瘻管を切除する。次に内瘻孔は之を露出しその直上部で粘膜を切り夫より上部の粘膜を充分剝離して肛門縁迄引き下げる。この際引き下げられる粘膜に緊張があつてはならぬ。内孔より下部の粘膜は肛門周圍の皮膚と共に縦切して兩側に廣く剝離する。かくすれば括約筋内面が露出されることになる。兩皮膚粘膜瓣はその尖端を瘻管切除に依つて生じた括約筋外の創最深部に縫合する。又上方から引き下げられた粘膜瓣は内孔を被覆して之を肛門縁に縫合する。即ち内孔は粘膜を以て外孔は外皮を以て被覆されることとなる。

術前準備 腸管を完全に空虚ならしめる事が最も重要である。然らざれば糞便のため手術創が感染し粘膜が上方に退縮するからである。

後療法 術後1週間は流動食を攝らしむ。阿片劑は使用せず。

(Moszkowicz : Zbl. Chiv. Jg. 65, Nr. 16, S. 856 (1938))

5. 胼胝性十二指腸潰瘍の大出血に就て

著者は出血に依り危険に瀕したる十二指腸潰瘍症例4を挙げ内2例は手術に依り他の2例は剖検に依り何れも十二指腸後壁に生じたる胼胝性潰瘍にしてその底部に於て開放された血管を認めかゝる症例に於ては手術以外患者の生命を救助し得べき方法なしと述べて居る。

胃出血は急激に大出血を來すものと小出血を繰り返すものとを區別しなければならぬが前者は大血管或は強靱な胼胝性潰瘍面の比較的小血管からの出血で内外的療法では止血しないものである。假令一時的止血を見ると雖も早晚大出血に因り生命を失ふ運命にあるものである。胼胝性潰瘍に於ては一般に周圍組織強靱なるため出血血管の退縮に依る自然止血を見ないものである。殊に十二指腸後壁に於ては滲潤は脾臓組織内に迄及び浸さるゝ血管が脾十二指腸動脈或はその分枝にして危険極りなし。

尙小出血を繰り返す場合と雖も血色素量が漸次低下し全身状態も悪化し行くものは根治手術を要す。

手術々式は切除を要し潰瘍底に於ける出血血管は之に纏絡結紮を施し潰瘍底部を焼灼してをかねばならぬ。

一般状態悪しき場合は Friedmann 持續点滴注入を施して食鹽、葡萄糖、血液及び藥劑を投與する。之は術前、術中及び術後を問はず數時間、時には數日間施行するを要す。

(G. Alferts : Münch. med. Wschr. Jg. 85, Nr. 5, S. 175 (1938))

＝ 内 國 文 獻 抄 ＝

1. 流行性感胃及び急性肺炎に於ける 自家血液療法

自家血液療法は August Bier に由りて初めて試みられしものにして現在一般にその効果承認せられ、且屢々適應さるゝは諸種皮膚疾患、「アレルギー」性疾患及び炎症性疾患に於てなり。而して炎症性疾患にして本療法の卓効ありとせらるゝは急性肺炎なり。本療法の作用機轉は本療法こそ理想的なる受動的及び能動的免疫療法にして、又一面非特異性蛋白體療法なる點にあり。

著者は流行性感胃及び急性肺炎に本療法を試みて卓効を認めたり。即ち急性肺炎患者40例中死亡者5例にしてその死亡率は12.5%なり。本療法の著明なる下熱作用は注射後數時間にして現はれ、20時間餘にして顯著となり、40時間餘にして平温に歸するもの多し。而してその間相當度の體温上昇を見る事ありと雖も多くは一過性なり。

その術式は次の如し。

大量血液注射の場合は枸橼酸曹達を用ひて血液凝固を防ぎ、肘靜脈より採血して直ちに之を大腿部皮下或は筋肉内に注射す。少量の場合は枸橼酸曹達を用ひずとも容易に10—15ccの血液採取、注射を行ひ得。流行性感胃の如きは30—20—10ccの注射にて多くは可なり。肺炎に於ては發病初期にありては比較的大量(50—40cc)を使用し、効果遅々たる時、或は發病既に日を經過せるものにありては比較的少量血液(30—20—10cc)を反覆注射するを以て原則とす。

(濱中正一、柏村長治、稻垣惠、實驗醫報、第24年、第283號、1008頁)

2. 胃潰瘍の急性出血に對する處置、特に 大量輸血を以てする胃切除術に就て

著者は6例の胃潰瘍急性出血に失血量と略同量の血液量の大量輸血をなして胃切除術を施行せしに死亡は「チフス性胃潰瘍の1名のみなり。即ち胃急性出血時に於ける大量輸血の下に施行せられる胃切除術は極めて良好なるものである事を知る。されば胃急性出血に際しては成可く多量の輸血をなし、尙再三再四の胃出血を起さぬ中に外科的手術の施行如何の適應を早期に決定する事を希望すと。

(齋藤眞、實驗醫報、第24年、第283號、1020頁)

3. 催眠劑の選擇に就て

催眠劑は効果の現はれ方により3種に分つを得。

(1) 就眠劑 効力比較的早期に而も不快感を残さず (プロムラル、アグリン、ルミナル)

(2) 就眠劑 睡眠を深くする。(フェノドルム、ヴェロナール、デアール)

(3) 睡眠特長劑 分解遅く永く寝らせるもの。(スルフォナール、トリオナール、抱水クロラル)

以上の3種類があるが各個人により効力は動搖する故に混合して用ふる方が賢い。單純な神經性不眠症には晝から鎮靜劑を連用せしめ、尙就眠前に就眠劑を頓服せしむる方がいゝ。

又夜間寢床に入ると俄に雜念を起して睡眠を妨げるものは頭部の充血を却るために溫浴、夜間散歩、溫湯の飲料、臥褥、寢衣等を溫めおくことの準備も亦必要である。

又、睡眠持續を妨げる原因を診定して對症的に之れを除く事を要す。

勿論睡眠を促す原因は生理的作用も重大である故に眞の睡眠を障碍する理由や事情を徹底的に洞察し單に不眠症の對症療法のみならず、日常生活状態に至る迄も立ち入るを要す。

(杉田直樹. 臨床醫學, 6卷, 54號, 359頁)

4. 輸血に際し顧慮すべき二三の注意

輸血症狀は輸血時又はその直後に起るものと、輸血後時を経て起る症狀との2種がある。

第一の症狀 呼吸困難, チアノーゼ, 不安感, 胸内苦悶, 全身の熱感, 脈搏の微弱及び緩徐, 失神.

第二の症狀 惡感戰慄, 高熱, 痙攣, 蕁麻疹, 譫語, 血色素尿, 黄疸.

前述の副作用を却る爲めに適當なる血液型を有する給血者を選ぶべきである。

勿論血液型の判定には注意を肝要とするも次の諸條件を顧慮するを要する。

- 1) 寒性血球凝集反應 温度の低い時寒性血球凝集素の作用により起る血球凝集反應である。
- 2) 汎血球凝集反應 M, J, N, S, K, T等の汎血球凝集反應を起す細菌が血球に附着して一定の變化を與へた時に正常血清中に含まれてゐる汎血球凝集素の作用により起る。多くは採血後3時間以上を経たる血液の輸血に際して起る。
- 3) 細菌性血球凝集反應
- 4) 物理化學的血球凝集反應
- 5) 原因不明なる血球凝集反應
- 6) 非特異性反應

等の凝集がありて血液型判定に際して誤りて起す事を知つておく事を要す。

従來の血液型以外に色々の新血液型あり。

M, N式, Q式, E式……等あるも特にQ式血液型は最も重要にしてQ抗凝集素を血清中に含有してゐる人にはQ型の血液を輸血する事は危険である。

(古畑種基. 臨床ノ日本, 6卷, 55號, 491頁)

月 報

— 學 會 —

金澤醫學會第147回例会

5月24日(火曜日)午後2時より金澤醫科大學法醫學講義室に於て開會、其の演説次の如し。

1. 家兎の妊娠時に於ける上氣道所見

金澤醫科大學耳鼻咽喉科學教室

野 垣 徳 次 郎

上氣道にあらはるゝ變異として、種々の場合が擧げられてゐるが、私は妊娠によつて起るものを家兎を用ゐて實驗した。

體重2000瓦以上の家兎を妊娠せしめ、其の心臟筋肉内に「クロロホルム」を直接注射して屠殺したのであるが、かくして得られたる所見を簡単に總括すれば、

鼻腔の前甲介、鼻中隔、喉頭の會厭軟骨喉頭面、披裂軟骨部下方、氣管後方等には著明に發赤を認め、就中鼻中隔、披裂軟骨部下方、氣管後方等に於ては擴張せる血管の走向が認められた。

又、假聲帯には粟粒大の灰白色顆粒が多數に出現し、該顆粒は相融合して表面粗造なる隆起を呈するものを多く認めた。之は顯微鏡的に細胞浸潤であつた。然して假聲帯は一般に浮腫狀を呈した。かゝる顆粒狀隆起は又鼻底部に於てヤコブソン氏器官及びその後方にも多數に發現せるものを多くの妊娠例に於て認めた。

細胞浸潤は其の他鼻腔の後甲介及び、喉頭の會厭軟骨喉頭面、更に喉頭及び氣管の諸所に於ても認められた。

次に、會厭軟骨喉頭面に於ける重層扁平上皮と顫毛圓柱上皮の移行部は妊娠家兎に於て著しく不規則となれるものを認めたものがあつた。

脂肪物質は、重層扁平上皮の角質層及び顫毛圓柱上皮の顫毛部、扁桃腺内等には、妊娠家兎に於て量的に増加したりと認め得るものがあつた。又、異常沈着としては重層扁平上皮の基底部に近く、脂肪顆粒の發現せるものあり、粘膜固有層の結締織に脂肪染色をなせるものを認め得たものがあつた。

質 問

中 村 八 太 郎

今述べられた變化殊に炎症變化を妊娠により起ると看らるゝか又妊娠により促進せらるゝと看らるゝか。

答

妊娠により促進せらるゝものと看る。

2. 歐洲醫學昨今の状勢

金澤醫科大學大里内科教室

日 置 陸 奥 夫

僅か許りの歐洲滞在に依つて斯る問題に關し概要を傳へんとすることは針穴から天を覗くやうなもので何人も之を怖るゝ所である。自分とても斯云ふ意味合から再三之を辭退したのであるが、仲々に許して頂けないので止むなく壇上に立つた次第である。勿論皆様には私以上に御承知置の事柄許りであつて、唯々此座に皆様と共に彼地の醫學の根底を流るゝ昨今の太勢を大雑把に今一度鳥瞰して見やうと云ふに過ぎないことを豫め御斷り申し上げます。

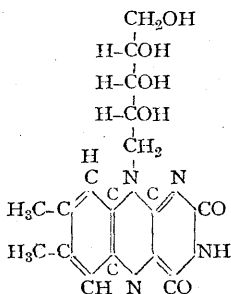
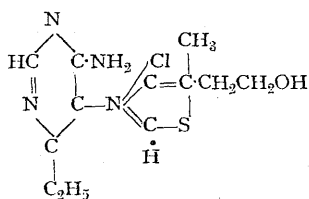
病原菌發見の華やかなりし時代は去り、所謂細胞病理學の發展も或意味に於て改變を餘儀なくせられたる昨今、吾醫界に大きな嵐を引起し、幾多の輝しい業績を示して呉れた所のは何と云つても生化學の領域に屬する所のものではなからうか。而も「グキタミン」、「ホルモン」、「フェルメント」と云つた領域に於ける收穫は素晴らしく大きかつた。到底その逐一の過去に於ける文獻を涉獵する餘裕もなければ、今その必要をも認めないのであるが、その化學的構造が漸次明かとなるに従つて、吾人が「グキタミン」とは斯の如きもの、「ホルモン」とは斯の如きもの、と大略夫々定義付けて居た所のもが、その境界が次第にぼやけて來たことを認めざるを得ない。

今度 Heiderberg から Berlin の生理化學教室へ榮轉した Dr. Lohman は Co-Carboxylase を精製、分

解し P-frei の Pyrimidinspaltstück と diphosphorierte Imidazolspaltstück とを得ることが出來た。Co-Carboxylase には VB₁ 同様な作用があるが、VB₁ は Co-Carboxylase の作用を有しない。併し之は宛も Warburg の黄色酸化酵素の prosthetische Gruppe が Laktoflavin-phosphorsäure であるのと恐らく同一關係に存するものであるま

いかと氏が Naturwissenschaft に豫報を發表した時に書いて居る。

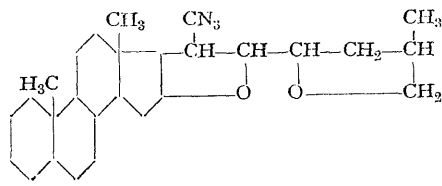
實に此黄色酸化酵素と云ひ、Co-Carboxylase と云ひ、その本態の一部が Vitamin と稱せし所のものに



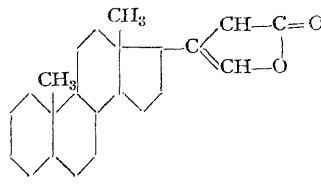
6,7-Dimethyl-9-d-ribityl-isoalloxazin
"Laktoflavin"

屬して居たことが知られるれば、Vitamin の生體内に於ける作用機轉が次第に分明になつて來たとも解す可きであらう。

Vitamin の内では Vitamin D が種々なる「ホルモン」、殊に性「ホルモン」、副腎皮質「ホルモン」等とその分子構造を等しくして居ることは Vitamin, Hormon の嚮を取除くものである。所謂 Steroid と解して



Nucleus of sapogenins



Nucleus of aglycones

斯く Cyclopenteno-phenanthrene 核に屬するものに他に膽汁酸があり、「ステリン」があり、「デギタリス」屬の植物性心臓毒「アグリコン」があり、又蟾蜍毒、「サポニン」の或ものも亦之に屬することは御承知の如くである。

私が1936年にその年の暮迄暫く厄介になつて居た München の Chemisches Institut d. Bayerischen Akademie では所長 Geheimrat Wieland は不相變此方面に關する研究に餘念がなかつた。「ドクトラント」に出される題目は蟾蜍毒があり、「ステリン」があり、膽汁酸があつた。

所長と共に Frl. Dr. Dane 其他の古參の助手達が「ドクトラント」の指導に當つて居た。私は膽汁酸に關する一部をなさしめられたのであるが、所長の在來の仕事の一つで醫學者に面白いのは種々なる膽汁酸の中で「デゾキシヒヨール」酸が種々なる水難溶性物質と結付いて、所謂 Choleinsäure として吸収せらるゝと云ふがある。近來 Cortese, Baumaun の兩人が此「デゾキシヒヨール」酸の「グリコール」と結合したものを作つて此者には Choleinsäure を作る性質がないこと明かにしたが、此結末はどう云ふことになるのであらうか。

「ビタミン」、「ホルモン」の化學的構造の闡明、合成等に依つて純粹な物質が比較的少量に得らるゝに至つた所から、その臨床上の適用に向つての更に廣汎な探求も亦臨床醫學界にあつて最近の一つの方向たるを失はなかつた。

1937年 Wiesbaden に於ける全獨内科學會でも此傾向が尙認められた。Prof. Schittenhelm の Hormonbehandlung des Rheumatismus なる宿題が夫である。同じく「ミュンヘン」の Prof. Stepp は「ビタミン」製劑を更に廣汎に凡ゆる疾患に適用してその種々なる適應に就き敷衍して居る。氏には近來 Vitamine u. ihre Klinische Anwendung なる勞作がある。

柏林では Charité 第二内科で Hormon の豊富なる供給を受けて同じくその臨床上の應用方面に關し開拓を試みんとして居たのを見學することが出來た。

Prof. Bergmann が近年 Funktionelle Pathologie を提唱し、その著作あることを知らない人は尠いであらう。氏は近代に於けるレントゲン學的、生化學的、生機學的 Explorierungsmethodik の發展に伴つての收穫を蒐集して、世は Zellulärpathologie より Funktionelle Pathologie の時代に入つたことを説く。同著は凡ゆる臟器領域に涉り單なる病理解剖學的所見のみを以て解明し能はざる諸種の事實を掲載せるものとも見てよいであらう。歐洲内科學會に於ける重鎮としての氏が豊富なる類例に依つて説く所に千金の重みが存すると云ふ可きであらうか。内科學會に於ける更に大先輩である所の Prof. Friedrich Müller は「ミュンヘン」に尙健在であつて、一日その講筵に接したことがあるが、その講演の一端にもこの事が説かれたのを以てしても Funktionelle Pathologie なる語は今や常套語として一般學者の口の端に上せられて居る所と見る可きであらう。兎角斯の提唱も許されるとすれば夫は近世に於ける生化學、生理學全部の勝利の賜である可き筈である。尙之よりも氏の臨床に於て啓發を受くるのは個々の症狀なり、所見なりの集つたものが現象の全部ではなくして、全體は實にその個々のものゝ密接な相互的關聯の下に於て成立する

故に個々の集り以上の意義を有すると云ふ見方である。此事は適當な例を以て云ひ表すことは困難であるが、臨床家が次第に體得する事實を卒直に主張する所に偉い處があると思はれる。「バセドウ」病は永久の驚愕なりと云ふ氏一流の考方、實例、悪性貧血に於ける脳症状と Vitamin B₁ との關聯、疾患の全體を心身一丸に把握しやうとする努力には仲々鋭い考察が存するやうに思はれる。

併し乍ら斯うした考とても亦何も今に始まつたことではない。Zellularpathologieに對し夙に敢然と對抗したのは Magdeburger Patholog, Ricker の Relationstheorie が宛も夫ではなかつたらうか。

別な意味に於て、乃ち Zellen のみが唯一の Körper の Element ではない、Zwischensubstanz も亦死んで居るものではないと云ふ全體的な觀方に發生學的考察を附加へて獨得の説明を試みて居るものに Leipzig の Patholog, Hueck 氏がある。氏の説は從來の何れの學者よりも具象的に、觀察を基礎として、觀念論的應酬を離れて居る所に特長を有して居る。所謂 Mesenchymlehre と云ふのが夫であるが、形態學者としては活潑な動きを示して居るものと云ふ可きであらう。併し同じ Mesenchymzelle から一方に Fasern や Knorpel を發生し、他方遊離せる血球を生ずると云ふが如き、或は分子構造上夫々一定の配列をなしたる物質を或は獨立した Zelle を同一細胞から如何なる機序によりて發生するものなるや、容易に信じ難き處多く、餘りにも説明に墮し過ぎて居るではなからうか。

氏の近著 Morphologische Pathologie は Bergmann の Funktionelle Pathologie と對蹠的意味を有するものではない。形態學的領域のみに於ける氏の革新的意見の開陳と見る可きである。

此著書の處々にも窺はれることであるが、更に Charité の Rössle 氏の病理等に於ても、全體主義的な傾向が強く、又そのことが今日の獨逸の病理解剖學に於ける著しい特徴であることは見學者の何れもが等しく認める所である。之を今少し具體的に云へば或程度迄今日の手法で研究し盡された細胞個々の所見に第一義を置かないで、諸臟器の關聯により注意を拂ふ、又剖檢の際に觀察し得らるゝ肉眼的着色、香気も顧みると云つたやうなことであつて、此處に到れば形態學を離れて生化學的關聯が寧ろ濃くなつて來る譯である。

自分は病理學教室のホンの二三を觀たに過ぎぬから詳しくは一切知らないが、他の傾向として、他の Moment と關聯を持たしめて形態學上の變化を追及し、その意義を究めんとするものも亦ないでないと云ふことである。自分の識つた中では Freiburg の教室、夫から München 等でも多分に此傾向があつた。

形態學的業績では腦腫瘍、卵巢腫瘍の分類の如き、材料の多きを加へると共に生れ出た仕事であらうが、吾々内科醫にとつて夫等の標本は物罷らしく感ぜられた。

Eierstock に於ける Granulosazelltumor, Dygerminome, Luteinzellentumoren, Arrhensblastome と云つたやうな分類、實例の如き、

Glioma に於ける Astrocytomas, Oligo-dendrocytomas 更にその幼若細胞の異常發育と目さるゝ Glioblastoma multiforme, Spongioblastoma polare, Astroblastomas, Medulloblastoma, Neuroepithelioma, Medulloepithelioma 細目分類の如き、形態學上では相變らず迷芽説とか刺戟説が gelten するものゝやうである。

伯林 Buch の Kaiser-Wilhelm-Institut für Hirnforschung は設立以來約10年を關した。此方面及び一般腦に關する標本の蒐集は實に貴重なるものとなつた。

現在の所長 Prof. Spatz は純粹の病理解剖學者であつて近年「ミュンヘン」より移り住んだ。此處の Dr. Kornmüller の腦波研究は其後も續けられて居る。

腦波描寫装置は「アメリカ」では外科手術室に直接連結せられたるもあつて一步を先んじて居るやうだ。

脳外科に就ては専門外でもあり、最近熊埜御堂教授より其後の進展に就て御話もあつたことと思ふ。日本でも脳外科將來の發展を念じて居られる人が寡くないが、一體日本では斯る多數の Gliom 患者を見るが如きことはないではなからうか。獨乙に於ける解體數は死亡例の6%と云ふことである。數は6%でも一解剖教室に集る死屍の數は夥しい。解體數から云へば材料が豊富に得らるゝからそんな感じもするやうに思はれるかも知れないが、一般臨床例より推してどうしても實際に寡いのでなからうか。同じ腫瘍でも肉腫の如き「ラインランド」地方に多いと云ふやうなことも面白い事實である。

結核の死亡者は獨乙では1万人に就き6,7人と云ふ數字になつて居る。甚しい時は日本以上に濃厚で22,3の時があつた事に比すると夢のやうである。専門家は醫療設備の完備、殊に近來外科手術等に依る早期空洞の處理等を擧げて居るが、同じ専門家でも疾病の發現に對する民族的な免疫現象を見逃してはならないことを主張するものもあつた。

結核に比して癌死亡率の1900年に7.2と云ふ數字から1930年13.7と云ふ數字の漸年的増加は國民の關心を高めずには居られなかつた。

夫かあらぬか癌の方面に於ける研究は結核の方面に於ける研究よりも遙かに活潑である。

その病理學的方面に於ては我山極教授の造癌に關する業績は造癌物質の化學的研究の進歩と共に歴史的に一層その價值を高めて來た。

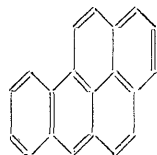
御承知の如く英國學派に依つて最初凱歌を擧げられた造癌物質では次の如きものがある。

1-2-Benzanthracen, 1-2,5-6-Dibenzanthracen, 5-6-Monomethyl-1-2-Benzanthracen, 6-Monomethyl-1-2-Benzanthracen, 6-Isopropyl-1-2-Benzanthracen, Cyclopentano-1-2-Benzanthracen.

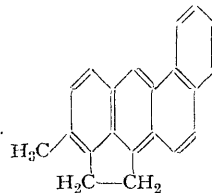
次の如きもの迄造癌性のあることは油斷がならない。

3-4, 5-6-Dibenzacridin, 1-2, 7-8-Dibenzacridin.

更に別の方面に於て「テール」から直接に次の如き強力な造癌物質が得られた。而して之よりも後より強

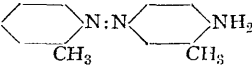


1-2-Benzpyren



Methyl-Cholanthren

力な造癌物質 Methylcholanthren が見出さるるに及んで此物質が所謂 Chrysenbindung をなして居る所から俄然生理的物質たる膽汁酸、「コレステリン」、性「ホルモン」との關聯が注目され、此方面の研究者に興味多き研究題目を提供して居るのであるが、斯る生理的物質から造癌物質を誘導することには未だ成功を見ない。

佐々木氏の O-Amidoazotoluol  は斯る系列とは離れて存する譯であるが、その間隙は將來如何なる發展に依つて埋合されるであらうか。

有機化學者の立場からすれば斯の如き物質は比較的簡單なる構造を有するものに屬し、如何に mühsam な仕事に屬するとは云へ蛋白質の化學の如き結局は手を付ける可く取残されたる問題であると云ふ。

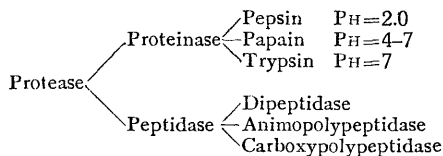
一般に hochmolekular の物質の Bauplan に關する研究の進歩は蛋白質化學の領域に於ても亦認められる。

羊毛繊維、皮革工業方面の研究が一面その進歩を促したものに相違ないが、之等の研究はその儘同時に、生理上の研究に大きな關聯を有する。今少し詳しく云へば、その染色に關する理論は直ちに生體組織化學的研究とその基礎を等しくするものであり、繊維の物理學的變化に關する理論は生體組織の病的、年齢的變化に關する研究と同一の流れに沿ふものであるが故に興味深い。

尙又此等 Bauplan に關する研究の進歩、例へば蛋白分子内に配置せられて居る Polysaccharide の解明と云つたやうな事柄は免疫學的にも重大な關聯を齎すであらうことを忘れられない。

之は單に Glycoproteide に就て述べた迄に過ぎないが、其他之等 Proteide に屬して從來知られた核蛋白體、色素蛋白體等の外に、同じく所謂 Pheron と Agon とより成る幾多のものが明かにされ、夫が酵素、「ホルモン」に關聯を持つと云ふことは輒近の大きな收穫であらねばならない。黄色酸化酵素、Co-Carboxylase に關しては既に觸れた所である。「ホルモン」では「インスリン」、腦下垂體「ホルモン」等に於て斯る例が擧げられて居る。酵素が本來の蛋白質と prosthetische Gruppe とよりなると云ふことは「ミュンヘン」の化學者 Geheimrat Willstätter の想定に始まり、現今獨逸學派に依つて漸次闡明せらるるに至つたものである。米國に於ける Northrop, Summer の Pepsin, Trypsin の純粹精製に關する美事な研究は必ずしも之と背馳するものではない。その得たる結晶は凡ての蛋白としての構造を有して居ることは事實にせよ、Prosthetische Gruppe を別に持つて居てならないと云ふ反證にはならない。prosthetische Gruppe が蛋白分子の表面に單に吸着せられて居るのでなくして、寧ろ分子内に深く結合して居るのだと考ふことに依つて、より事柄が明瞭にさへなるやうである。

酵素作用の特異性は益々明かとなり、その分類は次第に精細になりつゝある。自分が最後に足を止めて居た「ドレスデン」の「カイゼル・ウケルヘルム」皮革研究所では所長 Prof. Grassmann は Protease に造詣が深かつたが、氏は今日 Protease に關して左の如き分類を擧げて居た。



氏等は蛋白質の Bauplan の解決に斯る酵素を使用して仕事を進めて居る。Pepsin, Trypsin の結晶化に關する Northrop 一派の研究は暫らく措くも、爾餘の酵素物質に就ても次第に純化されつゝあることは事實である。

諸種の酵素が臟器を異にするに従つてその所在を異にすることは醫學的に諸種の問題を提供する。

獨り漠然と臟器と云ふに止まらず、如何なる細胞にそうした酵素作用の生成が存するかと云ふ、Linderström 一派の組織化學的研究も其後益々學者の興味を惹きつゝある。胃粘膜の Hauptzellen が「ペプシン」の產生に與り、Deckzellen は鹽酸を分泌すると云ふ證明が醫學者の興味を嘗て惹いたことは御承知のことであると思ふ。其手法を學ばんとする學者は未だに跡を斷たないやうである。

Myelocyten や Lymphocyten は Kathepsin を含むが、Lenkocyten には Trypsin のみを含むと云つたやうな Willstätter 等の業績も此部類に屬せしめられるであらう。

酵素の化學性に關する如上の如き考方は免疫學に於て免疫原と云ふものの解釋に關する變革と「アナロギー」を有する。

凝集反應、沈降反應、補體結合反應等々の所謂免疫現象なるものの生起には抗原として夫が蛋白質でなければならぬと考へられた時代は左程古いことでない。續いて「リボイド」の抗元性が云々せられ、更に

る。又腫瘍の發生、細菌の侵襲に依る此等物質の生成傷害もある故に抜本的には此等の壊滅に向つて意を注ぐ可きことも論を俟たない。

微生物の治療に向つての化學的療法の研究は製藥會社の研究室に閉ぢ込められて醫家は其の代辯をなすに過ぎないこととなつた。

斯様なアカデミカルな學問の進展と患者の治療とは不即不離の關係にあるやうなもの實際には必ずしもその並行を許されない。政治に於て元來實踐より發足した「ナチオナルソシアリスムス」は醫療の側に於ても從來の診療方法に不満をいだいて所謂自然治療法の忽せにす可らざるを提唱し、學會に對して希望をすらすら述べるに至つた。

その要求の内面的原因に至つては懷古の意味も寡らず存ずるであらう、が獨逸に關する限り、その生活狀態の一般を識り、診療の實狀を見る時に一應必然的のことであるかのやうにも思はれる。「ドレスデン」の町立病院に於て食餌療法に主なる考慮が拂れた試みが行はれ、一般醫を志すものはその講習を受けねばならないと云ふが如きもその希望の一端の表れであらう。

と云つて食餌療法に於ける新たなる理論が科學的に展開したと云ふ譯ではない。

その主旨は多とす可きであるとしても、自然療法なる語の陰にかくれて學會等に於て一部同國人の不明瞭な態度のうかがはれたことは惜む可きであつた。

科學に關する限り研究題目の自由と云ふことは近來更に文部大臣の名に於て明かにせられたやうに紙上聞知した。併し研究所等に於て夫が生産的的目的に添つた方がよいと云ふ傾向はさらでだに強いと思はれる同國に一層強められて居るやうに思はれる。

研究費の充分でないことは屢々耳にしたが、國家の文化に對する關心は依然強いものがある。或は柏林「ダーレム」の「カイゼルヴェルヘルム」研究所の如き、或は「ハイデルベルグ」醫學研究所の如き、その充分なる設備は眞に羨む可きものがある。當時奥國の疲弊は斯の如き文化機關にも現はれて居たやうであるが、瑞西の如きは獨逸に優るとも劣らざる最新の設備を持つ研究所を有することは衆知の事實である。

尙獨逸では軍備の充實に汲々たりしにも不拘、又學校、病院の改築せらるるものも寡くはなかつた。夫は貨幣の循環を活潑にして勞働の敏活なる動員を企圖するに依ると云はれる。

猶太系の學究は殆んど追はれたが、之に代る可き人材の登用に依つてその缺を補はんことが行はれて居た。未だ大陸に止まるもので Prof. Oppenheimer の如き和蘭に脱れ新たに酵素化學雜誌を發刊して居ることも學界に於ける「トピツク」であらう。其他維納市に逃れて居たものが可成りあつて學部に依つてはその大半を占めて居たのであるが、之等の人も今度の獨逸併合に依つて Arbeitsplatz を失つたことであらう。

政情の變化に依つて獨逸に於ける學術の凋落如何も一應問題にせられた處であるが、父祖より傳承された大きな傳統は何と云つても力強いものがある。而も著名の學者と雖も研究室を失つてはなきも同然であるから學術中心の移動を遽かに斷ずるは尙早たるを免れ難いであらう。

但し出版界に就て、例へば醫學、生物學の領域に於て著しく國際的な傾向を帯びて來たことは争はれ難い事實である。各方面多岐に渉る之等文化的所産を時折に整理して新らしき Arbeitsrichtung を提示しやうとする種々なる Ergebnisse と云つたものがその例に屬する。斯る場裡にあつて、邦人の文獻にのるものものが漸く多きを加へて居ることは欣快事であるが、そうした人の多くは不斷に自己の業績の歌文に依つて世に問ふて居る人であつて、吾人は何等かの形に於て國境を超えて相互にその所産を頌ち合ふ可きであることは今も昔も變る可きでないと思ふ。

歐洲學者の交遊，見學は各國境を接して居るが故に比較的容易に行はれ，昨日他の知識は直接，目，耳に訴へて今日吾の糧である。獨逸に於て國人の國外旅行は外國爲替拂底の爲に甚しく制限せられて居るのであるが，學會に出席するが如き場合には非常な特典が考慮せられて居ることを目撃することも出来た。

吾人も見學は常に怠る可きでないと共に，一面今一層交互に知識の交換を圓滑にしてその缺を幾分なり共補綴す可きであることを痛感する。

— 雜 報 —

天長節祝賀式

4月29日午前9時40分，學長(代理中村教授)は判任官の參賀を受け，午前10時職員，學生，生徒一同大講堂に參集，天長節祝賀式を舉行，午前10時30分式を閉ぢたり。

記 念 日

5月11日午前10時，職員，學生，生徒一同大講

堂に參集記念式を舉行，午前10時30分開式せり。

學 位 授 與

金澤醫科大學に於て4月22日附石川縣成瀬桓，5月18日附長野縣深尾立雄，福井縣井關尙榮，富山縣今村昌一，栃木縣青木嘉治に孰れも醫學博士の學位を授與せり。

— 叙 任・辭 令 —

●文部省

5月11日

金澤醫科大學教授 笠 森 周 護
補金澤醫科大學附屬醫院長
金澤醫科大學教授 中 島 實
金澤醫科大學附屬醫院長ヲ命ス
金澤醫科大學教授 古 屋 芳 雄
中華民國へ出張ヲ命ス

●金澤醫科大學

4月16日

小 泉 健 吉
金澤醫科大學副手ヲ囑託ス
小兒科學教室勤務ヲ命ス

4月20日

副手 鈴 木 敏 勝
願=依り副手囑託ヲ解ク

4月28日

副手 木 村 知 孝
願=依り副手囑託ヲ解ク
雇 穴 田 歳 嗣
願=依り雇ヲ解ク

助教授 日 置 陸 奥 夫
昭和13年度學生生徒身體検査醫長ヲ命ス

4月30日

金澤醫科大學助手 高 橋 二 郎

依願免本官

副手 谷 久 松
同 大 石 悌 三
同 武 内 寅 彦
同 山 脇 國 嵩
同 上 出 長 啓
同 圓 道 正 夫
同 宗 茂 雄
同 山 本 尙 典

願=依り副手囑託ヲ解ク

5月1日

金澤醫科大學助手 山 内 正 人

依願免本官

副手 植 村 肇

願=依り副手囑託ヲ解ク

5月2日

副手 中 村 正 道
同 植 木 貴
同 西 東 利 男

願=依り副手囑託ヲ解ク

金澤醫科大學副手ヲ囑託ス

理學的診療學科勤務ヲ命ス

5月3日